

彙 報

第 55 回日本語学会大会

京都大学において昭和 41 年 10 月 15 日公開講演会, 10 月 16 日研究発表会を開催。

1. 公開講演:

朝鮮資料	浜田 敦
精神薄弱者の言語活動について	江 実

2. 研究発表:

音声学的に見たる音節について	岩本 忠
東京大阪における無声母音について	杉藤美代子
ロシア語史上における双数について	天野和男
古代ロシア語における動詞前綴について	山口 巖
十一~十四世紀のビルマ語碑文に表れる 二種の不規則表記について	大野 徹
言語干渉に関する一考察 ——実験音声学的アプローチ——	打田佐太郎
日本語のプロテスタント教でのいくつかの 固有名詞の由来	都竹通年雄
文法構造の関係概念と範疇概念 亜について	橋本萬太郎
Cline	井本 葵一 J. O. ガントレット

昭和 41 年度第 3 回委員会

日 時: 昭和 41 年 9 月 5 日

場 所: 学士会館本郷分館

出席者: () 内は委任状受託者

浅井恵倫, 泉井久之助(4), 亀井 孝, 高津春繁(8), 小林智賀平, 小林英夫,
佐藤 孝, 柴田 武(1), 鈴木孝夫, 徳永康元, 野上素一, 服部四郎(1)。

白紙委任状 2 名。委員総数 35 名。

議決事項:

1. 本会会長新村出博士の九十の賀を祝い, 評議員・委員全員が発起人となり, 会員から募金(均一 500 円)することにした。
2. 秋季大について
 - 1) 日程細目を決定した。

- 2) 研究発表者、発表題目及び発表順を決定した。
3. 第10回国際言語学会議への派遣代表に関して討議し、第4回委員会で再討議することになった。
4. 言語研究50号の印刷状況、言語研究が郵政省から学術刊行物に指定されたこと、文部省の刊行補助金8万円が確定したことの報告があった。
5. 明後年の夏の第8回国際人類学民族学会議に学会として協力することに決めた。

昭和41年度第4回委員会

日 時： 昭和41年10月15日

場 所： 京都大学

出席者： () 内は委任状受託教

泉井久之助(3), 亀井 孝, 木村彰一, 高津春繁(7), 五島忠久, 佐藤 孝, 柴田 武, 鈴木孝夫, 関本 至, 徳永康元, 西田龍雄, 野上素一, 長谷川松治, 服部四郎(2), 前田護郎。 白紙委任状1名。 委員総数35名。

議決事項：

1. 第10回国際言語学会議代表派遣について審議した。(正式代表としての立候補は泉井久之助氏のみ)
2. 大会運営について審議決定した。

昭和41年度第5回委員会

日 時： 昭和41年12月5日

場 所： 学士会館本郷分館

出席者： () 内は委任状受託教

泉井久之助(4), 高津春繁(6), 河野六郎, 小林智賀平, 小林英夫, 佐藤 孝, 徳永康元(2), 野上素一, 服部四郎(3), 前田護郎, 三根谷徹, 村山七郎。
白紙委任2名。 委員総数35名。

議決事項：

1. 第10回国際言語学会議への学会代表として泉井久之助氏を確認した。
2. 昭和42, 43年度委員候補の委員会推薦名簿を次のとおり決定した。
浅井恵倫, 池上二良, 泉井久之助, 井筒俊彦, 今西春秋, 岩井隆盛, 亀井 孝, 川本茂雄, 北村 甫, 大村彰一, 金田一春彦, 江 実, 高津春繁, 河野六郎, 五島忠久, 小林智賀平, 小林英夫, 佐藤 孝, 柴田 武, 鈴木孝夫, 関本 至, 徳永康元, 永島栄一郎, 西田龍雄, 野上素一, 野村正良, 長谷川松治, 服部 健, 服部四郎, 前田護郎, 松平千秋, 三根谷徹, 村山七郎, 矢崎源九郎, 吉町義雄。 以上35名。
3. 新村会長九十の賀をお祝いする会員寄金の収支状況について報告があった。

4. 第8回国際人類学民族学会議の組織委員会へ柴田武委員を送ることになった。

◇新村出会長九十の賀のお祝いについての報告

本学会長新村出博士が昭和41年11月4日、九十才の誕生日を迎えられるにあたり、第55回大会(於京都大学)において、学会としてお祝いの意を表するとともに、委員、評議員が発起人となり会員から寄金をお願いしましたが会員諸氏の御協力により162500円に達し、うち通信費8750円、印刷費3750円を除いた150000円を泉井委員を通じ会長に贈呈いたしましたので御報告いたします。

◇本学会評議員時枝誠記博士は、昭和41年11月12日、紫綬褒章を授けられた。博士は、言語学・国語学・国語教育にわたって御造詣深く、この方面において学界・教育界に多大の寄与をせられてきたが、今回その多年の功績に対して紫綬褒章が授けられたのである。博士は昭和3年京城帝国大学助教授に任ぜられ、ついで同大学教授として国語学の講座を担当せられたが、昭和18年以來は東京大学教授として同大学文学部の国語学の講座を担当せられた。同36年停年退官され、東京大学名誉教授となられた。現在は早稲田大学教授として同大学文学部および大学院で国語学の講座を担当せられている。本学会評議員のほか、多年にわたり国語学会の代表

理事として同学会の運営に当られ、現在は同学会の評議員とされている。おもな著書に、「国語学史」(昭和15年)、「国語学原論」(同16年)、「同統編」(同30年)、「現代の国語学」(同31年)、「日本文法、口語篇」(同25年)、「同、文語篇」(同29年)、「古典解釈のための日本文法」(同25年)、「文章研究序説」(同35年)、「国語問題と国語教育」(同24年)、「国語教育の方法」(同29年)、「国語問題のために」(同37年)などがあり、言語過程説にもとづく独自の言語理論の展開と研究領域の開拓とにより、国語学界に清新の学風を樹立せられたことはよく知られているところである。

(松村 明)

◇本会評議員、東条操氏は、昨年12月18日逝去された。氏は明治17年12月14日、村松秀茂の4男として東京浅草に生まれ、翌18年東条家の跡目を相続、生粋の下町っ子としての性格・趣味・教養を身につけて成長した。東京府立一中・一高を経て、明治43年東京帝大文学部国文学科卒業。その人となりから、上田万年の鍾愛を受けた。卒業論文は、「方言資料として見たる東海道中膝栗毛」で早くも研究の方向を示している。卒業後、文部省国語調査委員会嘱託、東京文科大学助手を経て、大正5年文部省国語課の嘱託となり、方言調査計画を着々進めていたが、大正12年関東大震災で一切の資料を焼失の悲運に際会した。13年静岡高校教授(ここでの教え子に岩淵悦太郎氏その他)、昭和4年広島高等師範学校(後の広島大学)教授(ここでの教え子に藤原与一氏ほか)、昭和7年上京して、学習院大学教授(ここでの教え子に徳川宗賢氏ほか)に転任、以後19年までその任にあり、24年から32年まで再任され、国語学を講じた。その間、昭和13年から18年まで東大の講師として(ここでの教え子に金田一春彦・柴田武氏ほか)方言学概論を講じたほか、東京文理大・都立大学その他多くの大学へも出講した。また、NHKの用語調査委員、国立国語研究所の評議員、国語学会の理事その他の要職についた。が、特に本領の方言関係の学会への寄与が大きく、昭和3年の東京方言研究会には設立・運営に一役買い、6年以後月刊雑誌「方言」の発行に力を貸して、服部四郎氏・平山輝男氏はじめ多くの方言学者を世に送り出した。さらに、昭和15年には会長柳田国男を助けて日本方言学会を創立し、幹事の筆頭として東京豊島長崎本町の自宅を事務所に開放して、方言学の興隆に力を尽くした。著書には方言関係のものが多く、昭和2年に「日本方言地図・国語の方言区画」、3年に「方言採集手帖」、6年に「簡約方言手帖」、13年に「方言と方言学」(19年に増訂)、26年に大岩正伸氏の協力をえて「全国方言辞典」を編集。ほかに共編のものに昭和28年の「日本方言学」がある。いずれもその時の学界の水準を高める役をしたが、特に、「全国方言辞典」は日本で最初のこの種の辞典として学界の内外に重んぜられた。また、氏には昭和12年に「国語学新講」の著あり、国語学界の当時の進展の全貌を教える国語学概論の本として重んぜられた。氏は、方言学といっても、上田万年の直系を引き、ヨーロッパの比較言語学を基確にした、同系統の言語体系相互を方言と見る行き方で、方言区

画の問題に終始関心が強く、そのために、方言語彙を採集し、過去の日本人の生活や信仰を明らかにしようとする柳田国男の方言学とはしばしば対立した。しかし、氏はよく柳田をたて、協力して方言研究の興隆につとめた功績はまことに大きく、ことに、後進を教え、引き立て、その大成を喜んだ人からは、柳田を「方言研究の父」と呼べば、氏は「方言研究の母」というべき存在で、昭和32年に紫綬褒章を授けられたのは当然であった。氏は、30年に脳軟化症をわずらって右上半身まひを起こし、32年以後は一切の公職をやめて、自宅に静養、読書と見舞客との飲談を楽しんでいたが、41年臘月の早暁、病あらたまつて安らかに他界された。享年82歳、法名は芳言院松蒼文操居士、お墓は浅草菊屋橋の宗円寺にある。（金田一春彦）